マルサの女2

あの板倉亮子がマルサカットの寝癖頭を振り立てて帰ってきた！狙うは日本最強の地上げ集団鬼沢一家。マルサ危し！

伊丹十三監督作品

宮本信子／津川雅彦／丹波哲郎／大地康雄・桜金造・益岡徹／上田耕一・きたろう・不破万作
笠智衆／中村竹弥・小松方正・原泉／柴田美保子・洞口依子／加藤治子／三國連太郎

製作＝玉置泰＋細越省吾／脚本＝伊丹十三／撮影＝前田米造／照明＝桂昭夫／録音＝小野寺修／音楽＝本多俊之／美術＝中村州志／編集＝鈴木晄／SFX＝白組＋サンク・アール／音楽プロデューサー＝立川直樹／キャスティング＝笹岡幸三郎
グラフィック・デザイン＝佐村憲一／助監督＝久保田延廣／製作担当＝川崎隆 伊丹プロダクション作品／配給＝東宝株式会社

「お葬式」「タンポポ」「マルサの女」と、いつも途方もない映画を作り続けている伊丹十三監督が、最新作を作り上げた。無類の面白さを持つ映画として今話題の中心になっている「マルサの女2」とは一体どんな映画なのか？　直接監督に聞いてみよう。

「一年前に封切られた『マルサの女』では、監督は税金という意表をつく素材を、実にスリリングな犯罪映画に仕上げられ、あまりの面白さに中曽根首相まで見にこられた（笑）そして最終的には二百五十万人の、しかも日頃あまり映画を見ない社会人の観客を集めたことで大変意味があったわけですが、パート2は当時から考えておられたのですか？」

「考えてました。『マルサの女』は大人のための娯楽作品として作りましたので、ヒットしたら当然パート2もありうると思ってました。それに前回はいわばマルサの入門編だったので、あまり巨大な脱税を扱えなかった。それが心残りでもあったわけです」

「そこで今回は地上げを中心に据えられた」

「ええ。御存知のように大規模な地上げになりますと動く金額も何百億ですし、背後には大企業や銀行、それに政治家や役人もからんできて大きな構図になる。しかも、土地というのは日本経済を一番深いところで動かしている要素ですから、日本を語る上で土地を避けては通れない」

「土地本位制なんていう言葉もありますしね」

「要するに貧乏な人は一生懸命稼いで貯金する。しかし物価や地価の上昇で預金はどんどん目減りして憧れのマイホームは遠くなる。一方金のある人や会社は、銀行から金を借りて土地を買う。土地は値上がりして借金が目減りして含み資産が増え、更に金を借りる能力が増大して成長してゆく。この仕掛けが日本経済を支えてきた。その仕掛けの中心が土地ということです」

「今回の『マルサの女2』では地上げ屋の驚くべきテクニックが生き生きしく描かれているとか」

「国税局の査察部と実際の地上げ屋サイドと、両方から濃密な取材をしまして、そのエッセンスだけで映画を作りました。情報の量と中身の濃さに関しては自信があります。地上げと脱税に関する奇想天外な手口が次から次へと珠数つなぎに繰り出されて、息もつかさぬスリリングな展開になっています。そして――これは僕にとっては大事なことなんですが、かなり笑える映画になったと思います。映画館がお客さんの笑いで一杯になる時ほど僕にとってしあわせなことはないんです！」

「地上げに関して熱が入って肝腎のマルサの側の話をまだうかがっていませんでした。今回は相手が悪質なだけにマルサも相当苦戦するわけですか？」

「苦戦します、苦戦します（笑）マルサ危し！　特に相手が宗教法人を隠れみのにして脱税しますのでね、これを突き崩してゆくのが大変な苦労なんです」

「すると板倉亮子役の宮本信子さんも――ア、宮本さんのシカゴ映画祭主演女優賞、おめでとうございました――今回はかなりハードな役作りに――」

「ほとんど女のハンフリー・ボガートです（笑）タフでプロフェッショナルでヒューマンでユーモラスでという、非常に難しいキャラクター を完璧に演じてくれました」

「そして、地上げ屋の巨魁に三国連太郎さん」

「三国さんは素晴らしいの一語に尽きます。鬼沢鉄平という一個の人間を実にリアルに陽気に演じながら、それが人間そのものの根源的な悲しみにまで深まってゆく。こういうことのできる俳優さんは三国さんしかいないんじゃないでしょうか」

「最後にもう一つ。パートワンより面白いものを作るのでなければパート2など作る意味がない、と豪語されてクランクインされたわけですが、完成した今の御感想は？」

「そうですね、パート2というのはパートワンと同じ面白さだったら七十パーセントの観客しか集められないでしょう。お客さんは欲張りですから、恐らく倍面白くなくては納得してくれない。そういう意味では本当に苦労しました。しかしカメラの前田米造さん、照明の桂明夫さん以下、日本最強と思われる素晴しいスタッフに恵まれて十分映画の香りの高い作品に仕上がったと思います。今では『マルサの女』が可愛らしい小品に思えるほどです」

「じゃあ予定通り倍以上面白い――」

「ええ。『しまった、面白い映画を作りすぎた。また税金をごっそり持ってかれるぞー』という心境です（笑）」

「どうもありがとうございました映画を楽しみにしています」

東宝

板倉亮子（査察官）――宮本信子
花村（統括官）――津川雅彦
佐土原（査察部管理課長）――丹波哲郎
伊集院（査察官）――大地康雄
金子（査察官）――桜金造
三島（査察官）――益岡徹
秋山（港町税務署調査官）――マッハ文朱
山田（港町税務署調査官）――加藤善博
毛皮屋女主人――浅利香津代
モエヨ（ソープランド嬢）――村井のりこ
ホステス――岡本麗
役人（宗教法人担当）――矢野宣
元僧侶――笠智衆
猫田（鬼沢の腹心）――上田耕一
チビ政（猫田の子分）――不破万作
大衆食堂の主人――小鹿番
清原（写真週刊誌のカメラマン）――石田弦太郎
清原の妻――結城美栄子
米田（大学教授）――南原幸治
漆原（国会議員）――中村竹弥
猿渡（国会議員）――小松方正
老女――原泉
受口繁子（鬼沢の愛人）――柴田美保子
奈々（鬼沢の愛人）――洞口依子
赤羽キヌ（教祖）――加藤治子
鬼沢鉄平（宗教法人天の道教会管長）――三國連太郎

製作＝伊丹プロダクション／配給＝東宝株式会社
協力――西友／HONDA／アピス株式会社／ヤマトインターナショナル株式会社／オーヤマ照明株式会社／五雲堂／株式会社稲葉製作所／富士通／ストック・アンド・ゼノック／オ・エスファー／ボヘミアクリスタルコーナー／大洗ポートエリア／ベストインターナショナル／三陽商会